



# 陶磁器の島を

## 楽しむもう

今年で15回目を迎えた「天草大陶磁器展」。楽しみにしている人も多いのではないだろうか。15回というとまだ新しい感じを受けますが、天草における陶磁器の歴史は長く350年を超えています。今号では、国の伝統的工芸品でもある天草陶磁器を紹介します。

岡本庁(別館)・産業政策課 ☎1111

### 歴史を楽しむ

#### 日本の窯業を支える「天草陶石」

陶磁器は、天然に産出する土や石の粉を用いて形をつくり熱を加えて焼きあげます。そのため陶磁器のことを「焼き物」と言ったりしますが、焼き物に最適な石が天草にはあります。

「天草陶石」と言われる白色できめ細やかな岩石は、高温でも変

形しにくく窯業の世界では確固たる地位を築いています。

天草陶石が重宝される理由は、その成分にあります。焼き物に最適な成分で、調整することなくそのまま使うことができます。

そのため国内で生産される陶磁器原料の約8割が天草で採掘され、有田焼など有名な焼き物の産地で使われているほか、海外へも輸出されています。

#### 天草陶磁器の歴史

天草陶石がいつ発見されたのかは、諸説あつてまだ確かなことは分かっていません。古くから人々の生活必需品として砥石や硯石として使われていましたが、焼き物の原料として優れていることがわかり陶石として使われるようになりました。

高浜村(現在の天草町)の庄屋だった上田家に残る古文書によれば、1762年、上田家六代目の武弼が焼き物づくりを開始。その後、七代宜珍に受け継がれ、技術の向上と陶磁器原料などの産業化が図られました。

1765年には水の平焼が、1845年には丸尾焼が開窯。天草の土を使った陶器づくりも盛んになっていきました。

#### 歴史上の人物が絶賛

江戸時代の学者で発明家でもある平賀源内は1771年、当時の天草の代官所に提出した建白書「陶器工夫書」の中で、天草陶石

を「天下無双の上品(天下に二つとない最高級品)」と絶賛しています。

1877年には、水の平焼の三代岡部弥四郎が第1回国勲業博覧会で花紋褒賞を受賞。当時の内務卿大久保利通の名が記された賞状が同窯に展示されています。

また、苓北町にある木山陶石の初代木山直彦(本渡町本戸馬場生まれ)は、1897年に採掘業を開始。きっかけは、慶応義塾在籍時に福沢諭吉から出身地を聞かれ、「天草だったら陶石をやりなさい」と進言を受けたからだそう。天草陶磁器の歴史をひも解くと、歴史上の人物にも天草陶石や陶磁器がすばらしいものだと思知られていたことが分かります。



▲1910年、日英博覧会に出品され銅賞に輝いた水の平焼五代目岡部源四郎作のコーヒークップセット



▲世界に誇る「天草陶石」





# 違いを楽しむ

## 国の伝統的工芸品

平成15年、「天草陶磁器」は国から「伝統的工芸品」の指定を受けました。伝統的工芸品とは、

- ・主に日常生活で使われるもの
- ・製造過程の主要部分が手作りであるもの
- ・およそ100年以上の技術または技法によって製造されるもの
- ・伝統的に使われてきた原材料を使用していること
- ・一定地域で産地形成されていること

の条件があり機械化された産業製品とは区別されます。

「天草陶磁器」は天草地方で焼かれる陶磁器類の総称として、この指定の際に名付けられました。それまでの九谷焼や信楽焼といった「〇〇焼」と言われる技法が統一された焼き物とは一線を画し、磁器も陶器も存在する初めてのケースです。

## 陶芸を体験してみよう

天草文化交流館では、陶芸の体験ができます。ろくろを使った体験から、手びねりや器や置き物を制作したりと親子でも楽しめます。体験は予約(☎05665)が必要です。

また、窯元でも作陶や絵付け体験などを行っているところがあります。

芸術の秋、あなたもオリジナルの器を制作してみたいかがですか。



▲干支の置物なども制作体験できる陶芸教室

## 陶器

原材料：「土もの」と呼ばれ、陶土と呼ばれる粘土が原材料。

焼く温度：1200～1250度

素地の色：白、赤、黒、青、緑など色もさまざま

光の透過性：なし

吸水性：高い

風合い：土のぬくもりや素朴さが感じられる。厚手。



※一般的に言われているもので全てではありません。

## 磁器

原材料：「石もの」と呼ばれ、陶石を粉砕し粉にして使います。

焼く温度：約1300度

素地の色：ほぼ白色

光の透過性：あり

吸水性：低い

風合い：ガラス質が高いため、なめらかで硬質。薄手。



## ○たくさんの工程を経て完成する器







▲地元「高浜焼」の食器で給食を食べる天草小の児童。天草町の小・中学校では地元の器を大切に使っている



▲崎津教会などが描かれたアズレージョ

▶天草陶磁器と食の両方を楽しむイベント「あまぐさ丼井フエア」全店制覇で、好きな窯元でオリジナルの丼づくりが作れる特典も。11月30日まで



▲強度がある天草陶石はボタンやアクセサリなどの作品への広がりを見せている

**天草陶磁器アレコレ**  
天草陶磁器は窯元以外でも目にすることができます。飲食店で器として使われるほか、オリーブの容器やアズレージョなどさまざまなお店で使われています。



▲天草オリーブ園AVILOの限定ボトル。天草陶石を使って焼かれた容器は白磁が美しい

# 選

## ぶ楽しさ

### 窯元めぐり

磁器も陶器も両方楽しめる天草陶磁器。苓北町も含め、天草島内には30人を超える陶芸家があります。磁器だけの窯元に、磁器も陶器も扱う窯元、釉薬に天草陶石を使う窯元など、天草陶磁器には「決まった型」がないため、各窯元の個性を楽しむことができます。また、窯元めぐりは作家さんと話せる機会でもあります。使い方や手入れの方法、作品への思いなどを聞きながらの器選びも楽しさの一つです。



- 【恒例のイベント】**
- ・春の窯元めぐり(5月の連休)
  - ・秋の窯元めぐり(9~10月の連休)
  - ・天草大陶磁器展(11月初旬)

## interview インタビュー



### 「陶磁器の島」を目指して

「陶磁器の島」という言葉を使い始めたのは2000年に天草で開催された熊本県民文化祭からです。「産業文化」がテーマとなった同文化祭で、天草において職業として成り立つ文化が何かと考えるときに「陶芸」がその柱となりました。そこで、「陶石の島から陶磁器の島へ」という陶磁器振興に関する住民決議が採択され、その後の天草大陶磁器展の開催へとつながっていきます。

今年で15回目を迎えた大陶磁器展も年々規模が拡大し、秋の一大イベントにまで成長しました。天草陶磁器の認知も進み、地域活性化にもつながっています。しかし、県民文化祭での住民決議にある「陶磁器の島へ」を目指すには、イベントの開催だけではなく原点に立ち返る必要があると協議会の設立に至りました。

天草の地で代々引き継がれてきた窯の火をこれからも絶やすことなく次の世代へ継承する。陶磁器の島づくりへのチャレンジは始まったばかりです。

今年6月、陶芸家や観光業、行政関係者ら36人からなる「天草陶磁器の島づくり協議会」が設立されました。その会長に就いた丸尾焼五代目 金澤一弘さんに話を伺いました。

の育成は一朝一夕でできるものではありません。「いいものを安く」という風潮もありますが、天草陶磁器はそれにはそぐいません。面倒なことを手間暇かけて、特別なものを作り出す。そうすることで「天草陶磁器」は選んでいただけ、天草に足を運んでもらえることにつながると思っています。

国の伝統的工芸品でありながらも色んなことにチャレンジできる天草陶磁器。個性豊かな作り手が天草に集い、何かを作り出す・生み出す島にしていくことが「陶磁器の島」づくりにつながると考えています。

幸いなことに陶磁器展を始めたころは9つだった天草の窯元も今では30を超えるまでになりました。後継者不足に悩む産業が多いなか、若い作り手が育っていることはうれしい限りです。



平日が狙い目

県内最大規模の陶磁器展 (114窯が参加)

# 第15回 天草大陶磁器展

と き: 11月1日(木)・2日(金)・3日(土)・4日(日)・5日(月)・6日(火)

午前9時30分~午後5時まで(最終日は午後4時まで)

ところ: 天草市民センター

●ろくろ・絵付け体験… 11月3日(土)、4日(日)の午前10時30分と午後2時から。各回先着20人で参加費は1,000円。

●天草の特産品販売・飲食コーナー

●アマクサローネ…市内外の若手作家や芸術家などの作品展示(11/1~11/5)

【講演会】

●11/3 「日本の宝島、世界の宝」

河野俊行氏(国際イコモス会長・九州大学法学研究院主幹教授)

●11/4 「建築探偵が導く 世界文化遺産の謎解き」

藤原恵洋氏(日本イコモス国内委員会委員・九州大学大学院教授)

●11/5 東京藝術大学教授 日比野克彦氏による公開制作

天草陶磁器の島づくり協議会事務局(本庁[別館]・産業政策課内) ☎01111